

第12回米百俵賞受賞

(平成20年6月15日表彰)

するたに

駿溪トロペカイ (茨城県つくば市)



アフガニスタンの女性支援のため、「希望の学校」を設立し、ダリ語の読み書き、計算、裁縫、服装デザインの指導を行った。

■受賞時プロフィール

駿溪氏は昭和52年に来日。その直後、ソ連軍によるアフガニスタン侵攻が始まり、約23年間戦火が絶えなかった。平成14年、氏は25年ぶりに訪れた故郷アフガニスタンで、破壊しつくされた建物を目の当たりにする。わずかに残っている建物も銃弾で穴だらけになっており、昔の面影は全く残っていなかった。



▲23年に及ぶ内戦で破壊された建物

戦争によって多くの人々が殺されたアフガニスタンでは、成人男性の人口が極端に減少し、仕事に就く能力のない多くの戦争未亡人が残された。成人女性の識字率がわずか5%という状況の中、戦争未亡人となった女性たちの多くは仕事に就くことができず、物乞いで生活しなければならない状況にあった。さらにその母親を助けるために、子どもたちはストリートチルドレンとして働かざるを得なかった。いくら政府が義務教育化を進めても、こうした子どもは学校に通うこともできない。子どもが学校へ通うためには、まず母親に教育を受け、技術を習得させ、仕事に就く機会を与えるこ

とが大切だと考えた氏は、「希望の学校」を設立した。

「希望の学校」は、女性たちの自立を助けるため、ダリ語の読み書き、計算、服飾デザイン等を無料で行っている。平成 18 年には、幼児を抱えて勉強する母親や教師のために、託児施設が新設された。

しかし、成人後に学校に行かなければならないことを恥じる女性が多く、氏はカブール市内の女性の家を 1 軒 1 軒訪問し、彼女たちを勇気づけ、「あなたには学ぶ権利がある」と伝えた。

現在、「希望の学校」では、400 人の生徒が卒業し、その中には、裁縫によって家計を支える卒業生もいる。また、これまでに 4 人の研修生が来日し、洋裁の技術や保育について学んでいる。



▲子連れで学ぶ様子

■受賞後の活動

平成 15 年の「希望の学校」開校当時、集まった生徒はわずか 6 人だったが、民家を 1 軒 1 軒訪問し、教育の大切さを説いて回る中で平成 28 年までに約 800 人の女性が小学生レベルの読み書きと簡単な計算を学び、身につけた洋裁技術を生活の糧として自立してきた。

また、寄附に頼らず自立運営するため、平成 21 年にカブール校内に小さな縫製工場を併設。ここで洋服の注文を受けたり、作品を売ったりしながら、週に 20～40 ドル程度の収入を得ることができるようになった。

さらに、アフガニスタンでは母親の多くが 18 歳未満と若く、健康や衛生についての知識がないために子どもを病気で失うケースが多いことから、カブール校の生徒や周辺に住んでいる父母を対



▲平成 21 年に完成した縫製工場で、日本式の型紙を使って裁断を教える様子

象に、年3、4回、衛生やごみの処理方法などについての勉強会を開いてきた。

アフガニスタン国民は、平成26年の大統領選挙が終われば、国内の治安と経済の状況もよくなると期待していた。しかし、タリバンによる自爆テロのみならず、イスラム国のメンバーがさまざまな国からアフガニスタンに入ってきて治安がさらに悪化し、国民の命を危険にさらしている。

こうした状況を受け、「希望の学校」カブール校においても通学が危険なため生徒数が減少。平成26年からアフガニスタン国内での活動を一時停止せざるを得ない状況となり、令和3年現在もその状況が続いている。



▲平成15年に完成した「希望の学校」で学ぶ生徒たち

さらに新型コロナウイルスの影響により日本国内での活動も一時休止を余儀なくされる中、氏は新しい方法での支援を模索している。氏は「アフガニスタン女性の教育と自立へのサポートは私の使命。命がある限り続けていく」と語っている。

■主な受賞歴

- 平成21年 平成20年度茨城県国際化推進奨励賞
- 平成21年 国際ボランティア学会隅谷三喜男賞